



生誕100年 八木義徳の世界 ⑦

血と土とそして海の風から

八木義徳をめぐって(1) — 室蘭ゆかりの芥川賞作家、三浦清宏 —

三浦清宏は、私小説「長男の出家」で、昭和63年第98回芥川賞を受賞した室蘭出身の作家である。八木義徳とは、晩年十年足らずではあるが、親交があり、対談や講演などでよく席を連ねた。三浦は、昭和5年に、現在の室蘭プリンスホテル前の坂道を下って右角にあった母親の実家である小林写真館で生まれた。5歳まで暮らし、その後母と帰省しては、よく室蘭で過ごした。東京大学文学部英文学科を中退して渡米し、3つの大学で学ぶ。ニューヨークで旅行会社、パリで航空会社に勤務した後、昭和37年、10年ぶりに帰国した。昭和42年から平成13年まで、明治大学で英語を教える傍ら、45年、文芸誌「群像」にパリでの生活を題材にした小説「立て、座れ、飯を食え、寝ろ」を発表する。

一方では、禅や心霊の研究にも関心を持ち、平成3年から11年まで日本心霊科学協会の理事を務める。芥川賞受賞作「長男の出家」は、実際に自らが39歳から始めた座禅を発端に、長男が出家に至る経緯と家族の心情を元に描かれている。(平成23年新版)

室蘭を素材にした作品をという要望に応えて新聞に連載された「海洞アフルバロの物語」は、写真館を営む母の実家をモデルに書き上げた長編小説。幼少の頃からアイヌ文化に興味を持つ

ていた三浦は、室蘭に伝わるアイヌの伝説を激動の昭和に重ね合わせ、自身を主人公に、親戚の政治家で名譽市民の故南條徳男氏(作中では南原徳蔵)の半生を織り交ぜている。随所に登場する馴染みの地名が、昭和の室蘭をほうふつとさせる。題字、挿絵とも地元の書家、駒澤静秀と画家、佐久間恭子が担当したこの作品は、平成6年第24回日本文芸大賞を受賞した。(アフルバロとはアイヌ語であの世の入り口の意で洞窟を指す。室蘭の外海の崖面に見られる) 港の文学館の三浦清宏コーナーには、生原稿や芥川賞の正賞の時計、写真を展示。蔵書の寄贈は、7千5百冊にも及ぶ。(協力:港の文学館)

三浦清宏は、私小説「長男の出家」で、昭和63年第98回芥川賞を受賞した室蘭出身の作家である。八木義徳とは、晩年十年足らずではあるが、親交があり、対談や講演などでよく席を連ねた。三浦は、昭和5年に、現在の室蘭プリンスホテル前の坂道を下って右角にあった母親の実家である小林写真館で生まれた。5歳まで暮らし、その後母と帰省しては、よく室蘭で過ごした。東京大学文学部英文学科を中退して渡米し、3つの大学で学ぶ。ニューヨークで旅行会社、パリで航空会社に勤務した後、昭和37年、10年ぶりに帰国した。昭和42年から平成13年まで、明治大学で英語を教える傍ら、45年、文芸誌「群像」にパリでの生活を題材にした小説「立て、座れ、飯を食え、寝ろ」を発表する。

一方では、禅や心霊の研究にも関心を持ち、平成3年から11年まで日本心霊科学協会の理事を務める。芥川賞受賞作「長男の出家」は、実際に自らが39歳から始めた座禅を発端に、長男が出家に至る経緯と家族の心情を元に描かれている。(平成23年新版)

室蘭を素材にした作品をという要望に応えて新聞に連載された「海洞アフルバロの物語」は、写真館を営む母の実家をモデルに書き上げた長編小説。幼少の頃からアイヌ文化に興味を持つ

八木義徳生誕100年記念講演会

日時 10月1日(土) 15時から 会場 ホテルサンルート室蘭

◇「三浦清宏が語る『最後の文士』八木義徳」



◇「座談会」
三浦清宏(作家)、八木正子(八木義徳夫人)、樋口游魚(港の文学館の名誉会長)、山端穂(町田市民文学館学芸員)、土合弘光(八木義徳文学研究会) 司会:三村美代子(港の文学館館長)
※10月22日は「海明け文学散歩」も行います。(詳細は6ページ)
《詳細》港の文学館 ☎22-1501

人のうごき

(平成23年8月末)

人口 94,104(-83)

世帯 48,013(-28)

()は前月比

市・道民税第3期

国民健康保険料・後期高齢者医療保険料第5期

介護保険料第5期

10月31日までに納めましょう

編集後記



▶東日本大震災の後、「絆」という文字をよく目にする。今回、八丁平のコスモスの取り組みの話を知り、地道に地域で「絆」を築くことの大切さを感じた。皆さんも町会活動には積極的に参加しましょう。(t)

▶私には、かかりつけ医がいる。「おお、〇〇さん久しぶり。今日はどうしたの?」まるで近所のお店のようなノリ。私の顔色ひとつで病状の大半を理解する。体も心も癒やしてくれるそんな存在なのだ。(こな)

▶市内の施設をバスで巡る市民見学会を今年も開催。参加者に楽しんでもらえるか不安だったが、最後に「おもしろかった」「来年もやってね」という声を聞き、担当としては一安心。広報の仕事は幅広い。(お)

▶図書館の「復刻世界の絵本館」。独の医師がX'masに息子に気に入った絵本が無く、自ら物語と挿絵を書いた「もじゃもじゃペーター」は、今でも色あせず、世界中で人気。日本語訳も是非。(こ)

▶天皇陛下が室蘭市を訪問された際、撮影をする機会に恵まれた。訪問先や歓迎する市民に対し、穏やかな笑顔で応える陛下が印象に残る。一生忘れないこの笑顔は、自分の目標のひとつにしたい。(え)

地域の力

八丁平連合町会



コスモスを育てるやりがいを語る亀田さん

花で結ぶ地域の絆

八丁平を通る道道室蘭環状線では毎年8月から9月にかけて、かれんなコスモスが市民の目を楽しませてくれる。「この地域は二十年以上前から、沿道に花を植えているんですよ」と語る同会会長の亀田さん。

あるとき「人生の最後に通る、神代町の火葬場まできれいな「花道」で送ってあげたい」との声を聞き、鮮やかな花で沿道を飾ろうと、平成13年から道道沿いにコスモスを育て始めた。コスモスは炎天下や風雨に弱く非常に手入れが難しい。毎年4月末に土を起し、6月に種をまき、芽が出てきたら毎月草むしりを町会総出で行う。苦勞話もあるが、「大変な作業もみんなと一緒に汗を流すと、普段の行事よりも絆が深まって、やりがいを感じます」とうれしそうに話す。

手伝ってくれる人は、小さな子どもから80歳代のお年寄りまで幅広い。「花を見てみるとみんなの心が和み、助け合う心が芽生える。だからもっとたくさんの人に参加してほしいです」と亀田さん。今後はコスモスにこだわらず、気軽に育てられる多年草の花を植えるなど、長く続けていける方法を考えている。

花を育てる心で地域の絆を育てる。そうして結ばれた絆は、きっと次の世代にも引き継がれることだろう。

むろらん

2011年10月1日 No.967

■今月の表紙

9月12日、天皇陛下が来蘭。
栽培水産試験場を視察後、市役所を訪問されました。沿道に集まったたくさんの市民の歓迎に、陛下は笑顔で手を振って応えられました。

■発行・編集

北海道室蘭市市民対話課
〒051-8511 室蘭市幸町1-2
☎ 0143-25-2193
FAX 0143-25-2835
HP <http://www.city.muroran.lg.jp/>

■印刷

日光・福山印刷特別共同企業体